刊行するにあたり

私は、文学部長の小野信爾でありますが、最初に簡単に、本学における差別問題との取り組みを御紹介して、前置きといたしたいと思います。我国に深刻な社会問題として、部落差別問題、或は、韓国・朝鮮人に対する民族差別問題、障害者差別問題が厳として存在するという事は皆さん御存知のとおりであります。本学におきましても、十数年前から部落問題論の講座を開設し、数年前からは社会福祉学科に民族問題論および障害者差別論という講座を開設いたしました。ただ、形は造っても魂が入っているかどうかという事は未だに問い続けられている問題であり、教員、それから受講する学生双方の問題であります。九年前、詳しい経過は省略しますが、学内で部落差別問題が発生いたしました花園大学は、部落解放同盟の糾弾を禅で申します警策と受けとめ、以来こうした問題に真剣にとり組んできたつもりでありますが、差別落書きの出現、或はその他の形で、なお、魂の入っ

た状況というのを作り出せずにおるという事、この事実は率直に認めなければなりません。差別する者は差別される。我々、大学で学び、且つ、将来は皆さん方生活者として自立していかれるわけでありますが、その中で様々な形の差別の中に、差別の重層構造というべき社会体制の中に入っていくわけであります。これを打破するためには、まず差別とは何かという問題を一つ大学四年間の間にしっかりと見据えていただきたいと思います。それでは、本日の講師、真継伸彦先生を御紹介いたします。先生は、大変高名な作家でおありでございまして、三十数冊を越す御著作がおありでありますが、最近、先生から〝心の三つの泉〟という近著を頂戴いたしました。先生には本学仏教学科におきまして三年間にわたって仏教文化概論講座をご担当いただいたわけですが、その講義を中心に書き下ろされたご本でございまして、特に仏教学科の学生諸君には是非一読をお薦めしたいと思います。残念ながら、真継先生は、今年は本学に出講なさいませんので、仏教学科の学生諸君、直接真継先生の警咳(けいがい)に接する事は、あるいは、今日の講演が数少ないチャンスの一つになるかもしれません。どうぞ心してお聞き下さい。

なお、真継先生は、京都で、たぶんもう十年以上、部落差別と宗教研究会の委員でもいらっしゃいます。どうぞ、それでは、十二時ぐらいまでの予定で真継先生にお話をいただきます。

1989年12月

花園大学解放教育研究委員会委員長

小　野　信　爾

「日本文化と差別」

講師　真継伸彦先生

「日本文化と差別」という大変大きな問題について、できるだけわかりやすく、要領よくしゃべろうと思いますが、最初に、今日の話の主題とは別に、あなた方の入学のお祝いをこめて、いったい有意義な大学生活とは、どういうものかということをちょっとだけしゃべっておきたいと思います。

まず、言うまでもなく、あなた方の大学の4年間の生活というのは、人生の中で一番自由な時間です。だから、何でもできるわけですが、反対に何もしなくてもいいという面もあるでしょう。しかし、何もしない青春というのは、まことにバカバカしいし、勿体ない。一般的に言いましてどんな大学生活が幸せか。これの要約した結論というのは、まことに簡単です。「良き師良き友を見つけること」この一言にまとまるわけですね。私自身の数十年前（もう何年前になんのかな）四十年近く前の大学生活を顧みましてもこの一言に要約できます。私は当時

から小説を書こうとして仲間と同人雑誌なんかをやっていましたので、あまり授業の方には出なかった方だったけれども、大学で良い先生とお会いでき、そして、生涯鍛え合うことができる良い友人を多勢見つけることができた。それが生涯の幸なんですね。時間がないから深入りはしませんが、「良き師を見つける」ということは、自分が良き弟子でなければ決して出会えない。また、「良き友人を見つける」ということも、自分自身が良き友人でなければならない。これを言っておきます。

もう一つは、先程、有意義な青春ということを言いましたけれども、その有意義な、言い換えれば幸福な青春とは何か。別に青春期だけでなくて、人間は皆、生まれてきた以上は幸福に生きたいわけです。それが本能でしょう。しかし、幸福な人生とは何か。幸福ということの内容を考えてみると、はっきり知らない人が多いので、これも要約して結論だけ言います。幸福の内容は、活躍ということです。しかしながら一般に活躍というと、目立つという意味にも用いられますが、私の言う「活躍」はそうではありません。「活発に躍動する」即ち、生まれながらにして精神的及び肉体的にさまざまな能力を持

って生まれています、それら全部を活発に躍動させるというのは、これはなかなか難しい。しかし、一部でもいいから持って生まれた能力を、ちょうど植物が活発に花開くように、生き生きとした花をどんな分野でもいいから開かせる。それが幸福だと。反対に、せっかくさまざまに花開く能力を持っていながら花開かない、萎えたまま終わってしまう、そういう人生は不幸である。私はそういうようなことを、岩波のジュニア新書の『青春とは何か』という本にも書いています。どんな分野でもいいのです。せっかく大学へ入ったのだから、立派な先生と多勢会えるわけです。もちろん勉強するに越したことはないし、勉強するということも間違いなく持って生まれた知性を活発に躍動させるわけで、幸福の内容になります。勉強するなとは言いません、敢えて、勉強の方面だけでなく、スポーツでも、恋愛でも、何でもいいから何か自分の能力を活発に躍動させることのできる分野を見つけることです。そうしたら有意義な幸福な大学生活を送れるでしょう。

反対に、不幸な青春というのは一日中、下宿にすっこんで、一人ぼっちでテレビとか、パソコンとかを見てい

るだけというような生活です。そういう若者も最近は多いのでどうしてやったらいいのかなと、私はずっと考えているんです。そのようにせっかく持って生まれた能力を何もほとんど使おうとしない。そういう青春は、まことに不幸な青春である。私が、わざわざ言うまでもなく、自分にとって不幸である。そういうバカバカしい青春は生きないようにしなさい。

本論に入ります。先程小野先生が紹介のことばのなかでおっしゃったように〝差別〟の問題は深刻であると同時に長い歴史を持っています。だから、それをほんの一時間でしゃべるのは難しいので重要なことだけメモして欲しい。諸君は今から私がノートしなさいということはちゃんとメモして、重要な表現だけを頭の中に入れておいて、これからずっと勉強していって欲しいと思います。

まず最初に知らなければならないことは、差別というものは人間の労働から生まれた。まず最初に「分業」とメモしなさい。「差別の発生は分業である」ということを最初に知ってください。どういうことかと言うと、人間の労働には、簡単に言いまして、汚い労働ときれいな労働がある。言い換えれば、誰もがしたがる労働と誰も

がしたがらない労働とがある。具体的な内容は時間の関係もあって言いません。人間社会は歴史を顧ると、いずこの民族でも汚い労働に社会的な弱者が仕しめられた。それの代表が奴隷です。奴隷の発生の一番重要な原因は、戦争の捕虜です。戦争に負けて捕虜になって奴隷になった人が、誰もみんながしたがらない労働に仕しめられた。このようにして労働が人間社会の分業を生み、まず差別を生んだわけです。

そして、あなた方がこの大学で当然勉強するであろう仏教をはじめとする宗教は、そういう労働が生んだ差別を正統化した。「宗教は、労働が生んだ差別を正統化した」これを二つめにメモしてください。いいですか。その仏教をはじめとするさまざまな宗教が日本文化の場合、どんな思想によって、どういうふうに人間差別を正統化したか。このことをずっと勉強していったら、差別の思想の誤り、それがはっきりわかってくるわけです。

今から日本文化において宗教が果たした差別を三つの柱にくくって順番に説明します。まず、日本宗教の代表は、仏教と神道です。仏教思想の中で差別を正統化するという役割を果たしたものに二つあります。一番目は、

「業の思想」。業という思想が人間差別を正統化した。二つめは「不殺生戒」。不＝否定、殺生＝生物を殺す、即ち、生物を殺してはいかんというまことに、表面的には平和な思想が、現実には凄まじい差別を生んでいる。特に、小野先生がおっしゃった「部落差別」というものの深い思想的な原因を知ってほしいです。三番目です。これは仏教の方にもあるわけですけれども、神道・神社の方は、どんな差別思想を持っているかといいますと、「不浄観」。汚い物を嫌がる、ということです。神道というのは、まことに綺麗好きな宗教なのです。ですから、不浄な物は一切排除する。そういう神道の不浄観が大きな人間差別を生んだ。これは女性差別に一番関係がある。女性差別には三つとも全部関係がありますが、特に関係が深いのが、三番目に言った神道の不浄観です。

今日の新入生諸君の中には女性が多いので、ちょっと順番をひっくり返しまして、神道の不浄観がどんな差別を生んでるか、そこから説明します。神道の不浄の一つは、「黒不浄」。ブラックというふうに言います。そういう言葉がずっと日本人の中には生きてきている。二番目は「赤不浄」。三番目は「白不浄」といいます。

最初の黒というのは、死です。その不浄の内容というのは死体なんです。死体というのは瞬く間に腐ります。仏教が伝えられる前の日本人は、埋葬、あるいは火葬とそういう習慣もなかったから、死体はほうり放しです。そうすると単に不浄というだけではなく、不衛生なものを排除したい、という思想が生れてきたわけです。埋葬する場所もないわけですが、特に、この都であった京都では、一般の民衆の死体は、鴨川の川原に捨てられただけなのです。そして、夏になったら雨が降る。洪水で流すがままです。こういう状態が室町時代に入ってもあったわけで、それは、ちゃんと文献に残っている。この死骸を忌むというのは、どんなふうに生活文化の中に現れたか。日本人は、上流階級の京都の公家でも、みんな平安時代には、自分の家では死ななかった。主人でも自分の家で死体になったら、家が汚れるでしょ。だから別の所に行って死んだ。主人の階級でも、そうですから、奉公人は、もっと無残です。自分が仕えている家で病気になる、重病になってもう治らないということがわかりますと生きながら鴨川に捨てられた。これは室町期の15、16世紀になってもまだそういうことがあった。中世にお

いては飢饉になると多勢が街中で死んでいました。有名な鴨長明の方丈記を読むと一回の飢饉で京都中の街中で死んだ屍だけで、４万数千あったということです。そうすると、死体は汚れだから、町中で死んだ人達の屍を鴨川まで持っていかなければならない。そういう労働はみんなが嫌がる労働です。しかし、労働力は必要です。ところが不浄観によって、そういう労働に仕しめられた人間が差別されたということになるわけです。

二番目の「赤不浄」というのは、実は女性の生理です。女性が生理になりますと同じ家には住まわされません。別の所に隔離されまして食事も別です。それを別火、火を別にすると言います。そういう体から血を出す不浄な状態の女性と同じ火で煮炊きした食物は食べない。

三番目の「白不浄」というのもやはり女性に関係があります、出産です。白というのは赤ん坊のことです。出産というのは生理と同様に血の汚れということがありますので、やはり、出産期の女性も全部隔離されたのです。いわば、人間にとって当然の死、当然の生理現象が、死体の不浄、血の不浄そういうわけで差別されてきた。こういう愚しい観念、思想というのが今でも、まだ、生き

ている。あなた方は、ひょっとしたら初めて聞いたかもしれないが、文化というものは我々の心の深みにずっと生きている。そういう愚しい差別思想が神道という宗教となって、生き続けてきているわけです。

次に「業の思想」について言います。まず、インドの話をします。インドという国は暖いところですから、自然の恵みの豊かなところです。バナナや、マンゴーだとかおいしい果物が、いっぱい実っていますから、そういうものを採集して生きていた。昔のインドはそういう採集民族だったのです。そういう人々は、何も技術がない。だから、アーリア人はそういう民族をひっ捕えて奴隷にしても使いものにならないから、この人たちに、家の中の汚物の処理だとか、死体の処理だとか、一番汚い役につけたわけです。

関連して言いますと、インドに行くと、最初に着くのはカルカッタという大きな町です。大きいと同時にカルカッタは世界中で最も汚い町であるというふうに言われています。最近では少なくなりましたが、今でも一生街頭で生活している人が非常に多いのです。この人たちのトイレというのは、歩道と車道の境目です。そういう所

が排泄物の山になる。実際そういう場面を、私は何度も目にしています。雨季の盛りに、雨がザァザァ降っているのに路上で寝ていまして我々観光客はまたいで歩く。たいへん哀れです。何故、そういう人たちがいるのか。今は、世界中どこでもそうですけれどもインドでも森林がいたる所で伐採されています。インドは先程言いました採集だけで暮らしている民族で、今でも多勢います。そういう人たちが、森林が伐採されるものだから、生活の場から追われて、他に生活の場がないので大都会にやって来る。何の技術もないから乞食だけで生活しなければならない。そういう人が数百万どころではなくこういう状態におかれているわけです。

あなた方も、古代のインドの階級制度というのを、若干知っているとは思います。一番偉いのは、一番きれいな仕事をするバラモンという僧侶です。そして2番目は戦争はしなければならないけれども、その代わりに権力を持つことができるクシャトリア、武士・王族の階級です。三番目がヴァイシャと言いまして庶民です。四番目はスードラと言いまして奴隷です。これはアーリア人がパキスタンへ入ってから奴隷にした人たちです。そこま

でが人間で、その下にアンタッチャブル・不可触民と言いまして元々は採集民族である人たちが、人間以外の存在として階級づけられた。日本で言う穢多・非人（凄まじい差別用語が今でもあります。）というものの源流がこの不可触民なのです。

そこから、どうして「業の思想」が生まれたかというと、インドのバラモン教では、僧侶・お坊さんという一番偉い人は何回生まれ変わっても、いつまでもバラモンなんです。クシャトリヤもヴァイシャもスードラも同じです。そうすると、一番最低の人間と見なされない人たちも、そうして生きている限りは、これから無限に何度生まれ変わろうと相変わらず不可触民ということとなる。これ程絶望的な思想はない。(よく知っておきなさいよ。)ところが、お釈迦様が生まれた、西暦前五百年の頃のインドは大変な乱世でありました。元は奴隷として生まれても、(日本の豊臣秀吉も、まず間違いなく賤民階級の出で一番上までなった）乱世になったら実力によって身分をいくらでも上昇させることができる。そういう乱世の社会的現実が、人間の階級は永遠に一緒だという古いバラモン教の思想をひっくり返した。奴隷でも王様になれ

た。こういう社会的な事実、これをバラモン教が合理化・正統化しようとして「業の思想」を生みだした。例を秀吉にもってきてもいいです。賤民の子が太閤にまでなる。何故かということを考える。この人は前世に良い事をしたから最初は不幸な身に生まれても偉くなれる。このようにして「業の思想」ができました。

業という言葉は直訳したら行為です。人間は良い事をしたら良い人間に生まれ変われる。こういう「業の思想」が生まれた。「業の思想」というものは今、簡単に説明したように歴史的に顧みると、これは大変開放的な思想だったんです。奴隷でも王様になれる。良い事さえしたら、こうだから、これは非常な救いの思想です。ところが今の日本の部落差別を正統化する思想としてどういうふうにマイナス、悪い方向で貢献しているか、それは今、部落民におまえが生まれているのは、前世に悪をした報いである。だからしょうがない。業というのは、自分の不幸な境遇、差別をされている境遇は前世の因果で決まっている。こういう思想になりました。これを日本の僧侶たちは、仏教が入ってから千数百年間、差別されている人々にずっと説き続けてきた。これが事実です。これを

よく知っておきなさい。明治からこちら部落解放運動が生まれて、正面切って言う僧侶たちはだんだん減ってますけれども、現在でもいます。

では何故、「業の思想」が部落解放運動と敵対する思想であるのか。非常に重要な問題だから繰り返し言います。これは、結局、自分の現世における境遇は前世、過去において決定されている。そこから何も革命的な意志とか思想は生まれっこない。諦めさせるだけです。実際に僧侶はそういう諦めの思想を説いた。おまえさんの救いは、この世で部落民として生きてる限りはない。だから南無阿弥陀仏と言って死んでから極楽浄土へ行って幸せになりなさいと。バカバカしいでしょう。バカバカしいが事実ですね。そういう思想を僧侶は説き続けてきたわけです。それは何故か。もちろん僧侶も根拠もなしに説いてきたわけではない。そういう業の差別思想はちゃんとお釈迦様の真理の御言葉と言われる教典の、あっちこっちいたる所に書いてある。部落民に諦めの思想を説いて念仏だけ言うて浄土へ行って幸せになりなさい。これは浄土教ですね。法然とか親鸞の教えですが、その浄土教の根本の教典の一つに、やっぱりちゃんとお釈迦様の言葉

として、そういうふうに書いてあります。

ではどういうふうに書いてあるかと言いますと、岩波文庫の上下二巻の『浄土三部経』の上巻に『大無量寿経』という浄土教の根本教典があって、それの156ページから158ページの辺りに書いてあります。即ち、ある人間が醜く貧しくみんなから嫌がられる人間に生まれついたのは、過去世において悪い事をした報いである。では反対に、王様なら王様の身分、みんなから尊ばれ、服従される、そういう幸せな人間に生まれたのは、過去世で良い事をしたからだと。こういうまことに愚しい思想は、仏教の釈尊の言葉として併記されている。そうだから、僧侶は教典に御信奉する限り、そういう差別思想を説かなければならないのです。これが、私が一番批判しているところです。

また、日本の仏教の中心になっているお経は何かといいますと、実は二種類あります。一種類は今言いました浄土の教典です。もう一つは、有名な『法華経』です。これにも滅茶苦茶な差別思想がいっぱい書いてある。例えば身障者の差別に関しても書いてある。癩病、今はハンセン氏病といいます。今発病したところで治りますから、

癩病の患者さんの平均年齢は上がって、平均年齢が65から上です。人数は減っていく一方ですが、今、八千人はいらっしゃって、そういう人たちを私は毎年、奈良のある所へ招いて碁と将棋の会をする。そういう関西の学生諸君のボランティアの運動があって、そういうのに私も参加していまして、癩病の患者さんと毎年ゴールデンウィークになったら、碁ができるので碁をうってます。昔、癩病が治らなかった頃、癩病になるということは生きながら体が腐って死んでいくだけの恐るべき病気だったわけですね。法華経というお経を読むと、何故せっかく人間として生まれて癩病を病むのか、前世において法華経を謗しった報いである。だから、癩病の患者になって差別されるのは当然である。多勢の僧侶が異口同音に仏教最高の教典と言っている法華経にこういうことが明記されているわけです。こういうのが「業の思想」なんです。「業の思想」の愚かしさと同時に恐るべき犯罪性、それは、あなた方にもわかっていただけたと思います。

部落解放運動に関連させて言えば、日本の社会において穢多・非人という凄まじい身分差別が確立したのは、江戸時代の初期なんです。それ以来、積極的に僧侶たち

が幕府の権力に従属するためにそういう身分が何故あるのか、ということを、今、紹介したお経の言葉を引用して、「業の思想」によって、ずっと差別を説き続けた。恐ろしい事はその数百年に渡って説き続けられてきた差別の思想が民衆の心の深みに生き続けていることです。これをどうするか。単に抽象的に理屈だけで間違っていると、そういうことを言うたところで解決しません。

部落差別の内容は何かと言うと、三つにまとまります。まず、身分。それを幕府がつくった。同時に部落の人たちの職業。一定の職業以上には仕しめられない。ある職業についているというだけであれば、部落である。こういう差別があります。三番目は居住地です。つまりいみじくも部落という言葉が示してるように、部落の人たちは一定の所にしか住まわしめられない。その身分が職業と居住地の両方によって判然とわかるようになっている。

では、差別というのは、今、どういうところにはっきりとあらわれるかと言いますと、一つは、結婚。もう一つは、就職ですね。特に部落が多い関西では、全く一般的な例だけれども、（一般的というのは、多くの人が知っているということです）自分の息子や娘が誰かと恋愛

しまして、結婚話が生ずると、必ず興信所を雇いまして相手が部落民であるかどうかを調べます。そして、もしもそうだとすれば、陰に陽に排除する。こういうような恐るべき差別として現に生きています。だから、そういう部落民であるが故に、自由な恋愛あるいは自由な結婚が封じられて、陰に陽に排除されて、ついには自殺する。そういう例が今でも後を絶たない。

今、部落というのは居住地と言いました。そうすると、どういう事が生じるかと言いますと、部落民でなくても、そこの居住地に入れば、自分も部落民であると見なされる。そういうわけで、そこに住みたがらない。そうすると、そこだけ土地の値段がもの凄く安い。こういうような例が、現にあります。場所は言いませんが、部落解放同盟で闘っている私の若い友人が、関西のある大きな都会の大変駅からも近い、交通の便利な所に住んでいます。でも、そこの地価は周囲の３分の２なんです。一般の所は、今はすごく値上がりしているけれどもそこだけ安いわけです。そういうような所はアパートが建っても、いわゆる一般の人間は決して定住しようとしない。大都会でもそうです。ましてや、田舎となったらもっと

ひどいわけです。私はそこへは、しばしば行ってますけれども、岡山県のある被差別部落地帯は、道路一本隔てた隣りと地価が三分の一なんです。現在においてはこういうふうに、いわば、土地の値とそういう具体的な問題としても差別は現前として生きているわけです。まことに愚しい思想が日本文化となって今でも生き続けている。

もう一つの「不殺生戒」です。人間は生き物を殺めてはいかん。こういうまことに平和的な思想が仏教にはあって、見かけはそうであるが、この「不殺生戒」という思想が、やはり、凄まじい差別を生んでいます。こういう事を三つめとして最後に説明します。私には、非常におもしろかったんで、よく方々の講演で引用するのですが、明治の始めに、アメリカの大変若いイザベラ・バードという文化人類学者が日本の東北地方から北海道までずっと探訪して、出版した本があります。『日本奥地紀行』（高梨健吉訳）と言いまして、平凡社の東洋文庫に入っています。それを読んで非常におもしろかったのは、アメリカ人がやって来たというと、どこの村でも村人が一斉に鶏を抱えて逃げ出すんです。食べられるからと。日本人は、民衆は明治時代の初期になっても、まだ、鶏さ

えも食べていなかった。こういう事実が外国人の経験によって判明する。そうだから、おもしろかったのですね。それだけ、仏教の「不殺生戒」というものは日本文化として生き続けてきたわけです。じゃあ一体、日本人は鶏を何のために飼ってたかというと、卵を食べるためです。それから、もう一つには、天照大神、即ち、太陽の象徴のお遣いとして、夜明けに鳴くから、そういう信仰の対象として飼ってるわけです。

今でもインドには、ベジタリアンと言いまして菜食主義の人々が非常に多勢いる。日本でも、そういう文化があったわけです。しかし、一方では海とか山の両方の漁師・猟師は、魚だとかイノシシだとかを捕って食べている。この人たちは、仏教の不殺生戒を破っている。地獄落ちの人間だというわけで、海・山の猟師・漁師はずっと差別されている。今でも、方々の離島へ参りますと島の真ん中辺りに住んでいる農民が、海辺に住んでいる漁師と絶対に結婚しない。そういうふうな差別がやはり現実として生きている。

もうひとつ部落問題に関連した話です。日本は鎌倉時代から武家が支配しました、戦争ばかりすると武器、鎧

・兜というのが非常にたくさん必要になる。そういうのは全部皮製品です。威張ってる連中が鎧・兜を必要とするために、牛馬の皮をはいで、そこから武具を作る。そういう人々は、社会的にも必要です。しかし、今、言いました「不殺生戒」、死体を扱うという神道の不浄観、そういうものによって皮革業者はすべて差別された。皮革業は恐ろしく不潔で誰もしたがらない仕事ですが、社会的には必要でした。でも、そういう人は必要とされながら、社会的弱者が仕しめられ、そして、宗教によって差別された。そういうのが、「不殺生戒」という表向きは平和な美しいような思想の裏側に現として続いている。こうなるわけですね。

差別というものは復習しますと、労働、社会的な分業から生まれて、そして、それを宗教が正統化してきたという歴史があるということです。私の持ち時間は1時間程度だから、ここではあらすじだけをたどりまして、要点だけしか言えませんから、これから4年間の大学生活の中で、よく勉強してください。

日本の三大差別という言葉も知って欲しいから、ちょっと言います。日本人の三大差別というのは一つは部落

差別、もう一つは朝鮮人差別、そしてもう一つは沖縄人差別です。差別にはもちろん他にも女性差別あるいは、学歴差別などさまざまな差別がありますが、ある少数者の集団が極端に差別されたというのは、部落・朝鮮・沖縄の三つです。こういうふうに知ってください。戦前の日本では、例えば、うどん屋さんが店員入用とビラを貼りますと、沖縄人、朝鮮人お断りと書いてあるんです。恐るべきことは部落民は言うまでもない。こういうふうにして、私が住んでた下町でも歴然としてありました。

私は、京都の二条城の近所の下町で生まれたのは昭和7年ですけれども、私が小学校4年生まで住んでました家の隣りの隣りが、映画館の裏の日当たりの悪い細い路地なんです、そこに朝鮮人だけが住んでいる一間(ひとま)だけの長屋が4、5軒ありました。当時は、隣組という制度があって、私は、時々、回覧板を持ってじめじめした長屋に入りました。「こんにちわ」と大きな声を何回も出すと、ようやく朝鮮人のおばさんが出てきて嫌そうに回覧板を受けとった。何でせっかく持ってたのに嫌そうな顔をするんやろ、私にはかなかなかわかりませんでした。当然なんですね。日本の植民地収奪によって土地までを奪

われて、食いつめてみんな朝鮮から日本にやって来ているから、日本語ができませんね。そういう事だったのやなと大きくなってからようやくわかりました。そこに住んでいた朝鮮人の子供らは、その路地から一歩も大通りに出されませんでした。私の遊び仲間のわんぱく小僧が、彼らが表通りへ出て来たら全部殴り倒して、追い返した。そして、私が小学校に入ったのと同時に、その路地から二人男の子が同じ小学校に入りました。三日と通学できませんでした。毎日、やられるだけだから、つまり、そういうのが京都の下町、京都だけではないんですけれども、そういうのを私自身が小学校の時から見てるわけです。

また、その同じ学区に大きな被差別部落がありました。私が部落という言葉よりも前に経験したのは、やはり、平家の貧しい長屋がずらっと並んでいるところの近くを同級生と歩きますと、「真継、こういう恰好すんなよ。」と言うんです。僕はそれがわかりませんでした。だんだんとわかってきたのは、ようやく中学校の3年生ですね。敗戦後になって、民主々義教育というものを受けだしてからですね。だんだんとわかってきたんです。

最後に言いたいことは、同じ隣組であった朝鮮人の人たちの差別というものを私が見ていまして、最初に抱いたのは恐怖であったわけです。つまり、人は、差別する対象を恐怖とか嫌悪とか、そういうものによってますます、精神的にも感情的にも差別して、たいていの人はそのまんまで終わっているわけです。差別というのは、言い換えれば疎外とも言えます。疎外とは（これもいろんな意味があるんだけれども）一番簡単には遠ざける。つまり人は、社会的な弱者を汚い労働に仕しめて、同時にそういう人に対して恐怖とか嫌悪という感情で（感情とは精神の中で最も深いものですね）遠ざけた。実は私自身も小さい時はそうだったんです。やはり、中学の3年生、敗戦後からだんだんとわかりだした。中学校の同級生の中に大変優れた部落民や在日朝鮮人がいて、そういう人達と親しくなっていくことによって恐るべき差別の非人間性がだんだんと見えてきたのです。

差別というものが恐怖だとか嫌悪だとかいう感情として肉体化してしまっているのが、一般の日本人であろうと思います。だから、差別と闘うということは、まずそういう誤った恐怖感とか嫌悪感とか、そういう自分自身

が持っている差別の感情、それを自分の精神で切開手術をしてえぐり出すようにして、その誤った深い感情の中身というものをよくよく見ていく。そういうところから出発しなければならない。それは単に出発点だけです。しかし、それをまず最初にしなければいけない。そのためには、今日、簡単に言いましたように、仏教とか神道（これはいろんな良い面を持ってます。私自身、方々の神社とか仏閣へ取材に入りますと、やはり非常に懐しい。こういう宗教が、私自身の魂の故郷である。そういうふうに自然に思います。）という日本文化の根源である宗教、そのものが持っている恐るべき差別思想、それをよくよく見つめて勉強して自分がそういう宗教のマイナス面に対して批判力を培っていく、そういうところから始めるべきであると思います。

'89年度　新入生オリエンテーション講演より（4月11日）

（文責在編集者）